

ハイデガーの学問論

—「存在の問い」と学問の基礎付けの問題—

田村 未希

1. はじめに

哲学に固有の課題とは何か。ハイデガーがその一端を、存在の問いを通じた「学問 (Wissenschaft)」の批判的基礎付けの課題のうちに見ていたということは、初期の論文・諸講義における「根源学 (Ursprungswissenschaft) としての現象学」の構想から『存在と時間』期を経て、1938年の「世界像の時代」の近代的学問論まで一貫して読み取ることができる。「根源学」とは、1919/20年の「現象学の根本問題」講義において論じられるように、個別的学問のそれぞれの事象領域が生じてくる基礎である事実的生(「根源領域」)へと迫ろうとするものである。1923年の講義のタイトルにもなっている「事実性の解釈学」という課題にしても、諸学問の遂行そのものである「理論的態度」に対して、その態度を取る以前に出会っているはずの事実的な生の経験を記述することを通じて批判的基礎付けを行うものであった。また彼の名著『存在と時間』とその準備期の講義においては、「諸学問の危機」が語られた上で、根本概念の刷新による学問の基礎付けの可能性が主張されている。

存在の問いは、伝統的存在論とそれに基づく学問の遂行態度(「理論的態度」、さらに伝統的真理論の批判的解体を含意するものであり、根本的な学問の批判的基礎付けの試みとしても重要な意義を持っている。しかしながら、それでもなお明らかになっていないことは、結局のところ、ハイデガーが当時の学問に具体的にどのような問題を見ており、なぜ基礎の批判的解体がなされなくてはならなかったのか、という根本的な問題である。ハイデガーの学問論に関する研究は、1980年代に W. J. Richardson、J. Kockelmans や J. D. Caputo によって着手され、その後2000年に T. Glazebrook によってまとまった論考が提示された。Glazebrook の研究により、自然科学的方法論の絶対化の風潮への批判や、「表象すること

(repräsentieren)」という支配的思考様式への批判といったハイデガー学問論のポイントが明確化された (Glazebrook 2000, 60-4, 112-7)。しかし、結局のところそ

のことで具体的に何が問題になっているのか、と改めて問うならば、依然、一義的な答えが用意されているわけではない。

本稿の目的はハイデガーの学問論の眼目を改めて取り出し、その意義を検討することである。そのためにまず、当時哲学がおかれていた状況を概観し、学問の基礎付けの課題がいかなるものであったかを確認する（第2節）。その上で、ハイデガーが大きく影響を受けたフッサールにおける学問の基礎付けとハイデガーのそれを対比させ、特徴を際立たせる（第3、4節）。その上で、最後に、ハイデガーによる学問の基礎付けがどのような眼目を持っているのかを論じる（第5、6節）。

2. 学問の基礎付けの課題と時代背景

ハイデガーは諸学問に対して哲学が果たしうる固有の役割に強い関心を抱いていた。ハイデガーは哲学と諸学問との関係を巡る議論を1916–30年頃の著作や講義で繰り返し展開しており¹、彼の関心の強さを物語っている。しかしこのような関心はハイデガーに独自のものではなく、同時代の新カント派の哲学者や、ディルタイ、彼の師であるフッサールも共有していたものである。以下ではハイデガーの時代の思想的状況を俯瞰しつつ、学問の基礎付けがいかなる課題であったかを確認する。

19世紀半ばから20世紀初頭にかけての実証諸科学の急激な発展の中で、哲学が実証科学（とくに心理学）に解消されない固有の対象ないし領域を獲得し、独立した学の地位を得ることができるか、という課題は当時の哲学者たちにとって重大なものであった。ハイデガーにも大きな影響を与えているディルタイは『精神科学序説』（1883年）において、哲学を精神科学の基礎付けとして位置付けた。ディルタイによれば、学問は自然科学と精神科学の二つの分野に区別される。自然科学が自然現象を対象とする学であるのに対し、精神科学とはディルタイによれば「歴史的社会的現実を対象とする諸科学の全体²」である。

ところでそもそもこの場合「学問」とは何を意味するのだろうか。それは以下に見るように、「諸命題の体系的総体」である。

一般の用語法では、学問とはその要素が概念である命題の総体である。すなわち、完全に規定された概念が思考の連関全体の中で一定で普遍妥当的であり、その結合が基礎付けられ、最後にその結合のうちで各部分が、一つの全

体のために分与するという目的に結合されているような命題の総体である。なぜなら諸命題を結合することによって現実の一構成要素がその完全性において思考されるか、それともこの諸命題の結合によって人間活動の一分野を秩序付けられうるかのいずれかだからである。(Dilthey [1923] 1979, 4-5)

このように学問は、現実のある対象領域を理解するための理論（すなわち物理学や生物学）であるにせよ、あるいは人間の活動に秩序を与える規範を追求する学問（すなわち倫理学や政治学）であるにせよ、理論的体系性を有するものでなければならない。一般に、学問は体系化された知識であると言われる。また知識はそれが命題の形で表現される時に真あるいは偽と言われる。しかし真なる命題はそれが単独で存在していても学問にはならず、また真なる命題をただかき集めても理論にはならない。それらが体系の内に位置付けられ、相互に関連をなしていなければならない。この点に限れば、この学問の理解は、学問領域を問わず普遍的に妥当すると言ってよいだろう。ディルタイのこの学問理解は、ハイデガーが1915年の「歴史科学における時間概念」において展開している科学（学問）概念やフッサールが『論理学研究』において述べている学問理解とほぼ重なる³。

理論的体系性は学問の普遍的な条件とひとまずは言えるだろうが、しかし学問的知識を獲得したり、立証したりする方法は研究領域によって異なり唯一ではないはずである。だが当時は、自然科学の一元的支配という趨勢にあって、知識を獲得する探究の方法に関して、実証的自然科学の方法論が唯一のものであるかのようにみなされていた。しかし自然科学の方法論を、それとはまったく別の事象領域（精神科学の事象領域）に直接に応用することは適切ではないだろう⁴。

実証主義者たちが自然科学の方法を絶対化しようとしている傾向に対し、ディルタイは精神科学の固有な領域を画定しようとする。自然科学と歴史記述では対象の性質が全く異なっているのである。歴史学はたしかに多くの場合、文書や遺跡などの証拠を挙げて歴史を記述するため、この意味では「実証的」なのであるが、こういった証拠の果たす役割は実証的自然科学とは根本的に異なっている。ディルタイは歴史学が「現実についての判断を基礎とする⁵」と述べている。つまり、歴史的な出来事の解釈については歴史家の解釈と判断が入らざるをえないのであり、自然科学と同じ意味で「あるがまま」を捉えるということとはできない。しかしこれは歴史学が自然科学に対して劣っていて学問的でないという意味では全くなく、自然科学的方法を取ったとしても答えが出ないような対象領域だということなのである。

例えば、ソクラテスという人が冤罪で死刑になり、殺されてしまうと分かっているながら牢屋に座っている時に、「何故ソクラテスはそこに座っていたのか」と問いを立てるとしよう。自然主義的立場を取る場合、自然の因果関係に訴えて（極端だが）「ソクラテスの身体は骨と腱から形作られており、[…] 腱が伸びたり縮んだりすることによって、ソクラテスは足を折り曲げることができるのであり、この原因によってソクラテスはここで脚を折り曲げて座っているのである⁶」というような説明を手がかりとするか、心理学的な「快樂」の感情と「善」を結びつけて説明するかどちらかである。しかし両者とも結局、たとえ快樂を善と同一視したとしても、なぜ他の多くの可能性の中から彼が「そうすべき」と判断したのかという問題には答えることができない。この問題を説明するためには彼の判断がいかんが為されたのか、その目的・動機が解釈されなければならない。このほか歴史学においても「なぜルターは宗教改革を行ったのか」という問いを立てる時に、自然主義的立場では同様の困難が生じる。自然主義、実証的自然科学が支配的である状況に抗して、こういった人間の精神的、社会的、歴史的な問題を取り扱う精神科学の基礎付けこそ哲学の急務であるとディルタイは考えている⁷。

ハイデガーがディルタイの問題設定に共感していることは、『存在と時間』第77節「歴史性の問題の先述の提示と W. ディルタイの研究およびヨルク伯の思想の関係」、またその原形である1924年の『時間の概念』において端的に読み取ることができる（GA64 7）。ハイデガーはここではディルタイの方法・概念装置の不十分さを指摘しているヨルク伯を肯定的に評価しているのだが、出発点である「歴史性を理解すること（die Geschichtlichkeit zu verstehen）」という課題そのものは哲学的であるとハイデガーは考えている。

ディルタイの全ての仕事はその動機を、人間の精神的、社会的・歴史的現実、すなわち「生」を学問的理解へともたらすこと、そしてこの理解の学問性に適正な基礎を与えるための戦いから得ている。[…] 歴史的精神科学を真正な学問性の水準に高めようと努力することは、それゆえ二つの「側面」から、つまり主題となる対象の側と、対象を明らかにする認識の側の二側面から、一つの課題へと導かれる。この課題とはすなわち、「心的連関」そのものをその諸構造について徹底的に研究することである。（GA64 7）

ハイデガーも言うように、ディルタイの仕事（精神科学の基礎付けとしての哲学）は、人間の生を学問的理解へともたらすこと、そしてその固有の学問性を基礎付

けるために、そもそも人間の生がどのような構造を有するのかを明らかにするという課題を有していた。人間の「生」、「心的連関」、「人間の精神的、歴史的・社会的現実」を解明することなど様々な言い方がされるが、つまりは人間の「歴史的な存在」の解明を意味する。

歴史である存在者の存在構造が明らかにされなければならない。このような課題は存在論的な課題である。[···] 歴史性は一つの存在性格である。しかしどの存在者の存在性格だろうか。人間的現存在 (*menschliches Dasein*) の存在性格である。[···] 歴史性をそこから存在論的に読み取ることができる、現存在の存在に相応しい根本体制は時間性 (*Zeitlichkeit*) である。したがって、歴史性を理解するという課題は、時間の現象学的解明 (*phänomenologische Explikation der Zeit*) へと導かれる。(GA64 3-4)

以上のように、ハイデガーはディルタイの精神科学の基礎付けの課題に共感し、人間の歴史的現実のまさに「歴史性」を理解することを哲学の課題とみなしていた。ハイデガーはディルタイをこの点で高く評価するとともに、結局のところディルタイが、人間が「歴史的に存在する」という際の「存在」の意味への問いを立て損なっている点を批判している⁸。ハイデガーは、歴史的なものの存在様式を明らかにし、それに相応しい真理概念と概念組織を獲得する必要性を主張する。この課題を十分に果たすことなしには、他学科から借りてきた概念組織をもって「歴史的なもの」を語ることになる。ここで問われるべきは、「歴史的なものの存在はどのようなものか」という存在論的な問いなのである。こうして、歴史的なもの（ハイデガーの術語では人間の「現存在 (*Dasein*)」) の存在構造を現象学的に明らかにすることが、ハイデガーにとって第一の課題となったのである。

3. 心理学主義の問題とフッサール

また一方で、20世紀初頭当時の重要な課題として、自然主義の一樣態である「心理学主義 (*Psychologismus*)」にどのような態度をとるべきかという問題があった。フッサールは『論理学研究』第一巻において心理学主義を批判する。心理学主義とは、論理学の対象である判断を「心の中で起こっている思考の働き」であるとみなし、理念的対象に関わる論理学や数学を「心的作用」の理論として心理学に還元しようとする立場のことである⁹。フッサールは数学の基礎付けを出発点とし

ながら心理学主義の立場を批判し、論理学の対象は心理学に還元できない理念的な対象であることを論証しようとした。フッサールによれば、このように学問的知識の理念的客観性を確保し、学問を基礎付ける学が哲学である。

認識対象の理念性と実在的な認識遂行過程は区別されねばならないという論点
が、フッサールによる心理学主義批判の核となっている。心理学主義者が言うよ
うに、論理学や数学の理念的対象が実在的な心的過程に存するなら、その対象を
思念する者は、人や場所や時間によって異なった対象を思念していることになり、
命題（理論）の同一性が担保できなくなる。そのため、普遍的な理論の可能性そ
れ自体を否定することになる。つまり心理学主義は自己論駁的である。心理学主
義的な基礎付けではない仕方で、理論的認識はいかに基礎付けられるか。この課
題を受け、フッサールは「認識が可能であるならば満たされなければならない条
件」を問う¹⁰。

フッサールは学問がまさに学問であるための条件として論理学の諸法則を捉え
る。つまり個々の命題を寄せ集めてもそれは学問にならず、諸命題が基礎付け連
関の内におかれていて、それらが明証性によって裏付けられた体系になっている
場合に限り学問とみなされうるとフッサールは考える。このような議論は形式面
から見た学問一般を対象にする「学問の基礎付け」として機能する¹¹。

フッサールの提示する「認識論」そして「学問の基礎付け」の方向性は説得的
であり、かつて一時期フッサールの助手を務め、彼から後継者として認められて
いたハイデガーであれば、そのまま師のやり方を引き継いでも不思議ではない。
ところが、よく知られるように、ハイデガーはフッサールのとくに『論理学研究』
から決定的な影響を受けつつも、フッサールとは別の道へと進んでいく。

ハイデガーはフッサールの現象学において「存在の問い」が欠如していること
をたびたび問題化し、自分はその課題に取り組むのだということを一貫して主張
する¹²。とくに『存在と時間』第6節では、自分の課題を「存在の問いを手引き
として遂行される、古代存在論の伝承的成素の破壊」と規定している（SZ 22）。
しかし伝統的な（伝承されてきた）存在論はなぜ破壊されなければならなかつた
のか。このような課題にはどのような眼目があるのだろうか。この点を論じる前
に、まずはハイデガーがどういう点でフッサールにおける「基礎付け」の方向性
と決別したのかをもう少し詳しく見て行きたい。

4. 学問の実存論的概念

前節で述べたように、ハイデガーの時代、学問が「真なる諸命題の基礎付け連関」であることはその時代の哲学者の間での共通理解であった。ハイデガーはこのことを十分に承知した上で、以下の引用に見られるように、この学問理解にはコミットしないということをはっきりと述べている。

学問は一般的に真なる諸命題の基礎付け連関の全体として規定されうる。この規定は完全なものでもなければ、学問をその意味において射当ててもいない。諸学問は人間の振る舞いとしてこの存在者（人間）の存在様式を持つ。

(SZ 11)

ディルタイもフッサールも学問を「真なる諸命題の基礎付け連関」と理解しており、理論的体系性こそが学問の学問たる所以、学問の本質であると捉えているが、ハイデガーはこの規定に満足していない。ハイデガーによれば、学問は、学問を遂行する存在者の存在様式として現存在の存在様式を持つ。この主張は『存在と時間』だけではなく 1923 年夏学期講義「事実性の解釈学」でもなされている (GA63 72)。しかし、学問を行うのは人間なのだから、学問は人間の振る舞いであるというのは当たり前であろうし、命題が石ころのようにどこかに実在するのではなくて、それを理解する人間の理解の遂行過程の内で与えられるというのも、やはり当たり前のことではないだろうか。ところが、一見して自明に思われるこの規定が、実のところ、大きな一歩を踏み出している。

先の引用で、「学問を人間の振る舞いとして捉えなければならない」という論点が提示された。学問は「諸命題の基礎付け連関」としても捉えられるが、人間の振る舞いすなわち「遂行の仕方」という観点からすれば「理論的態度」である。しかし当然ながら、理論的態度は人間の唯一の存在の仕方ではないし、もっとも身近な存在の仕方でもない (SZ 11)。つまり学問の担い手である人間は、理論的態度を取る以前に、日常的に既に様々な意味において存在者に出会っているのである。学問を行う者は、日常のうちで出会われている事物を、その日常的意味、歴史的な脈から切り離して「客観」として考察し命題化する。この過程を経て学問は理論的体系として存立するようになるのである。このように現存在の日常的な在り方からいかに学問が発生するのかということについては『存在と時間』第 69 節において論じられている。この分析は初期フライブルク講義における「客観化する学問の脱生化 (Entlebung) 傾向」の分析 (GA58 75-8) の延長線上にあり、学問の対象は第一に先=学問的な生の領域において出会われるということが強調

されている。現存在が存在者に出会うのは第一に日常性の文脈においてであり、ここにおいて、学問を担う人間の事実性・歴史性を根本的に問い直すことをハイデガーは企図している。

5. 哲学に固有の基礎付け：領域的存在論と基礎存在論

『存在と時間』第3節では、諸学問の先＝理論的な基礎がとくに領域的存在論の観点から述べられている(SZ 9)。領域的存在論という言葉はフッサールのものであり、自然、歴史、言語など様々な学問の対象の存在様式に従って事象領域を分類し、それに相応しい探究方法や記述方法を明らかにするという課題を意味する。このような事象領域の区分は、既に存在領域の先＝学問的な経験の解釈と根本概念(Grundbegriff)の獲得によって導かれているとハイデガーは考えている(SZ 9)。これはつまり学問の領域区分が、歴史的・日常的に出会う存在者の理解に導かれているという意味である。

さてハイデガーによれば、諸学問の危機とは、それぞれの事象領域に対応した学問の「根本概念」が整合的に機能しなくなることである。その事例として数学基礎論論争(直観主義と形式主義の対立)や物理学における相対性理論の発見が挙げられている(SZ 9)。「根本概念」が整合的に使えなくなった時に、その学問で使われている原理とは別の原理が働き、その学問がその自己理解をより深め、より相応しい根本概念が獲得されるのだと、彼は危機をむしろポジティブに捉える(SZ 9)。1925年夏学期講義では「危機において学問的研究は哲学的傾向を帯びる。それは諸学がそれ自身ではなし得ない根源的な解釈を要求しているということなのである」(GA204)とハイデガーは述べている。諸学問は根本概念の危機に際して、その学問が対象としている事柄のもっとも根源的な所与にまで遡って、その学問の根本概念が汲まれてきたところの基礎を問い直すことになる。この意味でハイデガーは「哲学的」と言っているのであり、彼にとって学問の本来の基礎付けとはこのような「基礎の問い直し」を意味する。

根本概念の危機において諸学問の内部でその概念が改訂され、研究対象と研究する者の関係が変化するとハイデガーは言う。例えば「空間」・「時間」という根本概念が変わるならば、それに基づく学問的体系全体が揺らぐ¹³。それだけでなく、これらの概念に基づいている他の学問にまで影響は波及するだろう。この意味で、領域的存在論は必ずしも哲学のみが担いうるものではない。このような領域的存在論の方法をハイデガーは「先導的論理学(produktive Logik)」の働きとし

て理解しようとする (SZ 10)。この先導的論理学によって、ある存在領域の事象の存在の仕方、つまり探究する者に対してその事象がどのように与えられているかが明らかになる。この成果を、実証的諸学問はその探究の指針として利用することができる (SZ 10)。学問の「危機」において学問内部の根本概念が不整合になり根本概念の改訂が自然と促されるが、それをハイデガーは意識的に行おうとし、基礎の「破壊」と呼んだ。ハイデガーの言う「基礎付け」とはこの「破壊」を意味し、これまでの基礎を破壊して学問が新しい基礎の上に再構築されるような作業を指しているのである。

では哲学のみがなしうる固有の「基礎付け」の課題をハイデガーはどのように理解しているのだろうか。それは諸学問のそれぞれが対象としている個々の存在領域に関わるのではなく、それらの全体に関わるような課題である。この課題を、他の全ての存在論がそこから発現するような「基礎存在論 (Fundamentalontologie)」の究明とハイデガーは呼んでいる (SZ 13)。つまり、学問一般の原理である理論的態度が前提している、理論的判断 (命題) の真理そのものの存在論的基礎に対して問いを発し、新たに存在論的基礎を確保することが哲学の課題であるとハイデガーは考えているのである。理論的判断の真理の存在論的基礎とはハイデガーの言う「伝統的存在論」に他ならない (SZ 22, 223-6)。

ハイデガーは「伝統的存在論」の自明性を破壊し、存在の意味を新たに問おうとする。伝統的存在論に基づく理論的判断 (命題) の真理とは、命題と事物 (の直観) との「合致」として規定されるものである。学問を「真なる命題の基礎付け連関」として理解し、学問の学問性を形式的存在論に訴える学問観をハイデガーは問い直そうとしている。ハイデガーの理解する学問の基礎付けは、現在成立している学問観、つまり「合致」という真理概念に基づく命題体系という学問観をさしあたっては保存して、その上で (不整合や誤謬をそのつど修正しつつ) 正当化を試みる新カント派やフッサールの基礎付けとは方向性が逆なのである¹⁴。

理論化以前の事柄へと迫る可能性を開いた点、現象学という方法論を切り開いた点でハイデガーはフッサールを高く評価しており、彼の議論は基本的にフッサールの影響下にある。しかし、学問の基礎付けに関して、「真なる命題 (命題的真理)」と「形式的論理学/形式的存在論」を足場にして出発している点でフッサールと同じ方向には進めないとハイデガーは考えたのである。ハイデガーが、フッサールには「存在の問いが欠けている」と主張することは言い掛かりではなく、フッサールが「命題的真理」を基礎にして学問を基礎付けようとする際に、その

ことによって前提されてしまう伝統的存在論が、もはや問われることが不可能になってしまっているという問題を指摘する眼目があるのである。

6. 伝統的存在論の破壊と刷新がなぜ必要であったのか

しかしながら、諸学問において根本概念が整合的に使えなくなって刷新＝本来の基礎付けが起こるということは理解できるとして、哲学にとっては根本概念(存在論)の危機は起こっていないように思われるにもかかわらず、ハイデガーはなぜ伝統的存在論を破壊しなければならないということを主張するのだろうか。結局ここで問題になっている伝統的存在論とは何であり、何が問題なのか。ハイデガーが人間の事実的在り方を捉えるという課題を掲げるとき、一体何が問題になっているのか。本節においては学問の危機¹⁵についてまとまった記述のある「哲学入門」講義、「形而上学入門」講義や、近代的学問の問題について詳述されている「世界像の時代」を参照しながら、これらの問いに答えてみたい。

さて、まず伝統的存在論ということでハイデガーが意味しているのは、延長事物(res extensa)を範型とする存在論であり、物理学的自然はこれに基づいて描き出される。近代的学問(そして近代的科学技術)とデカルトに発する近代的形而上学は同一の本質を有している(GA5 97)。「デカルトの形而上学において、存在者が表象作用の対象であることとして、真理が表象作用の確実性(Gewißheit)として、初めて規定される」(GA5 87)。世界が「像」となる、というのは、世界ないし世界内部の事物が表象作用において対象化・客観化され、その限りで「存在する」と見なされるということである。そして世界の対象化と同時に、人間は自らを「主体」ないしは「主観」として、自らに対して対象化させて理解しようとする(GA5 91-2)。つまり、客観と主観はそれぞれ「対象」という同一の存在様式を持つものとして理解されてしまう。ハイデガーは客観主義と主観主義との間に必然的な相互関係があることを指摘している(GA5 88)。ハイデガーは、世界の対象化と人間の主観化の事態を以下のように見ている。

世界が像となり、人間が主体(Subjectum)となるという二つの経過の交差は、近代の本質にとって決定的であると同時に、近代の歴史の一見殆ど相容れない根本経過を明らかにする。つまり世界が征服されたものとしてより包括的より徹底的に意のままになればなるだけ、客体がより客体的に現れ出れば現れ出るだけ、それだけ一層〈主体〉は主体的に、すなわち一層差し出がまし

く立ち上がり、それだけ一層止めどなく世界考察 (Welt-Betrachtung) と世界論が人間の論へ、人間学へと変転する。(GA5 93)

世界の対象化・客観化(「理論的態度」)は、科学技術の本質であり、自然的事物を意のままに制御することを含意する。それと同時に客観化された世界は、人間の主観によって構成された表象であるため、世界論が人間学へと変転する。つまり世界の存在論を手がかりに人間を理解するのであるから、ハイデガーに言わせるならば、これは人間については殆ど何も言い当てていないような人間学である (GA5 111-2)。伝統的存在論の問題は、人間を主観として理解させ、その事实在り方を根本的に問えなくしていることである。

しかしながら、そもそもなぜ人間の事实在り方を解明する必要があるのか。前述のように、学問を根本的に基礎付けるためである。ディルタイが言うように、精神科学の基礎付けのためと言ってもよい。しかしながら、人間学、ないしは歴史学、そのほかの人文科学の目的とは何であるか。実証的自然科学の興隆以来、人文科学は確実さの点でも、有用性の点でも、自然科学より劣っていると見られる向きがある。これは真実なのだろうか。人文科学は自然科学のような明確な証明手順を持たず、役割もよくわからず、しかも人間、文化、歴史、宗教といった、認識者の立場によっていかようにも意味が変わりうるような事象についての相対的な知識を扱う学問なのか。決してそうではない。ハイデガーはこのような学問理解が生じた情況そのものの中に、深刻な危機的情況を見ていた。

ハイデガーが見ていた危機とは、「精神の無力化 (Entmachtung des Geistes)」という意味での、人間的知性そのものの危機である (GA40 48-51)。「精神の無力化」という危機はハイデガーにだけでなく、第一次世界大戦によってこの時代の知識人に明白な形で突きつけられた危機である (GA27 26-30)。これは、たとえばハイデガーと同年生まれのイギリスの哲学者コリングウッドによれば、「近代ヨーロッパ精神が、物体を要素とし、物理的な力を力とするものなら、ほとんどどんな情況でも制御することに成功しているにもかかわらず、人間存在を要素とし、精神力を力とするような諸情況を制御するには無力であるという対照は、それ [第一次世界大戦] に関わった全ての人の記憶に拭い去ることのできない痕跡を残した」(Collingwood [1939] 1970, 90) のである。ヨーロッパの知識人にとって第一次世界大戦とは、理性や人間性に対する信頼を根こそぎにする事件であった。つまり、理性はもはや現実を制御する力を持ち得ていないことが明らかになったのだった。コリングウッドは「自然を制御する力は、人間的な事象を制御する力の衰

えと足並みを揃えて増大してきたかと思われるほどであった。おそらくこれは言い過ぎだろう。しかし、1600年頃以降の人間の自然制御能力の恐るべき増大が、人間的情況の制御能力の増大、ないしはそれに類する何ものかを伴っていなかったということは明白な事実である」(Collingwood [1939] 1970, 91) と指摘する。科学技術の発展によって、非常に殺傷能力の高い高性能なライフルが登場したが、これを「誰に向けて発砲すべきか」という、規則的に処理できない問題に対処するための適切な方法がないのである (cf. Collingwood [1939] 1970, 101-2)。ハイデガーは「形而上学入門」の中で以下のようにこのような危機を論じている。

ヨーロッパの窮状と不安定、これらについては様々な兆候がある。その一つが精神の誤解という意味での精神の無力化であって、これは今日なおわれわれがそのまっただ中にある一つの出来事である。[……] 決定的なことは精神が知性の意味に解釈し変えられたということであって、この知性なるものは、眼前に与えられているものを考慮し算定し考察し、またそれをできるだけ改良したりそれに代わる新しいものを産出したりするのに聡明であることにすぎない。[……] 知性に成り下がった精神は、他のものの役に立つ一つの道具の役割を果たすまでに堕ちており、[……] 精神は知性として、本来的に現実的なものとみなされている何かとは別の、無力な上部構造 (Überbau) になってしまう。(GA40 50)

存在の問いを問うことは、精神を目覚めさせるための本質的な根本条件の一つであり、したがって歴史的現存在の根源的な世界のための、またしたがって世界の暗黒化 (Weltverdüsterung) の危機を制御するための [……] 本質的な根本条件の一つである。(GA40 53)

つまり知性は眼前の事物を算定し技術的に使用することの役には立っても、自分自身がそれであるところの人間の精神的な現実に対して無力なのである。学問の危機とは、人間の知性がもはや世界の潮流ないし人間の生を導き何らか良い方向へと改善していく力を持ち得ていないという事態である。精神の危機は戦争によって偶然的にもたらされたのではなく、近代的学問の本質から発している (GA27 26-7)。ハイデガーの洞察によれば近代学問は、何が「善い」ことでありそれはいかに実現しうるのかという問いに答えるための適切な道具立てを持たない。たとえいかに素晴らしい道徳的思想や人道的思想を打ち立てたとしても、それを實現

することは全く別の問題であり、知性の力によってそれが実現できると思われたのは偽りであったことが明らかになった。学問は困窮した現実を変革する力になりうるか。ハイデガーの存在の問いはこうした土壌から発してきたものである。

ハイデガーにとって、このような危機的状況に必要なことは、ヒューマニズムを語ることや理性的行動を促すことではなく、人間の事実的在り方を改めて根源的に分析することであり、その上で人間的状況における諸問題に対処する仕方をよく知ろうとすることであったと考えられる。このためにも先理論的な事実的生の分析が大きな意味を持つのである。そしてこのことを阻害するのであれば、デイルタイにおいて依然重要視されていた学問の理論的体系性や理論的態度への傾向は障害とすら言い得る。世界を「像」と理解させ、また人間を「主観」とするような、「理論」・「近代的学問」が基づいている存在論を批判的に解体し、新たに存在の問いを問うとともに新たな学問の在り方を模索することはハイデガーにとって時代の急務だったのである。

7. 結論

これまで述べてきたように、ハイデガーによる学問の基礎付けの特徴は、既存の学問の在り方（理論）を保存してそれを基礎付けるのではなく、むしろ破壊して新たな知の基盤を模索する点である。この基礎付けの方向性は反学問的であり、それ自体学問としての成立条件を満たしていないという批判を受けることがよくあるが、ハイデガーにとっては、そこで前提されている「学問」の理解こそが問題なのである。ハイデガーの学問論は、知性が現実を導く力になりえなくなっている時代の状況において、その原因となっている近代的学問の方法（理論的態度）とそれが基づく主観性の存在論を問い直し、新しい学問を可能にする試みである。

このようなハイデガーの主観性の形而上学・近代学問批判は、人間が科学技術を使っているようで、実のところ科学技術の方が人間の生を支配しているという後期の科学技術論へと展開して行く。本稿の冒頭で述べたように、Glazebrook

(2000) は、ハイデガーの学問論のポイントを、「自然科学の方法論を精神科学の方法へと拡張することへの批判」と、「科学技術思考あるいは表象的思考がそれ以外の思考様式を排除してしまうことへの批判」という2点にまとめているが、いまや明らかなように、「対象領域に合った方法を使うべきである」という問題は表層的な問題であり、根本的な問題は、伝統的存在論に基づく「理論」という知性の在り方そのものが孕んでいる、「知性（精神）が現実を導く力になりえなくなっ

ている」という問題である。ハイデガーの学問論は、彼の哲学における一つの各論的主題ではなく、存在の問いと一体になっている課題であり、その生涯にわたる思索を規定している中心的問題なのである。

¹ 例えば GA1 415–7, GA9 47–51, GA20 3–4, GA56/57 3–5, GA60 9–10, GA63 72, SZ 8–10 などを参照。

² vgl. Dilthey ([1923] 1979, 4).

³ vgl. GA1 415, Husserl ([1900] 1980, 11–7, 230f).

⁴ vgl. Dilthey ([1923] 1979, 5).

⁵ vgl. Dilthey ([1923] 1979, 5).

⁶ vgl. プラトン (2004, 126).

⁷ vgl. Dilthey ([1923] 1979, 5). 精神科学与自然科学が、その遂行様式(態度)と、それによって構成される対象において原理的に異なっているというディルタイの思想は、『イデーニ II』執筆期のフッサールによっても受容されている。この点については榑原(2009, 263–76)を参照した。

⁸ SZ 403. またディルタイからハイデガーが批判的距離をとっていることは「カッセル講演」で明確に述べられている。

⁹ vgl. Husserl ([1900] 1980, 50–3), Zahavi (2003, 8).

¹⁰ vgl. Zahavi (2003, 8–11).

¹¹ vgl. Husserl ([1900] 1980, 12–8).

¹² ハイデガーのフッサール批判でよく知られているものは「ブリタニカ草稿」をめぐるハイデガーのフッサール宛の書簡におけるものである。ここにおいてハイデガーは世界を構成する超越論的主観性がなんらかの意味で存在するものであり、そのような存在者(つまり現存在)の存在様式を問うことが『存在と時間』の中心的課題であると述べている(Hua IX, 601)。

¹³ vgl. GA1 424. ここでは相対性理論による時間概念の改訂(精確には「時間計測の方法」の改訂)が挙げられている。

¹⁴ vgl. SZ 10 「このような[ハイデガーによる]諸学問の基礎付けは、ある学問の偶然的な水準をその方法に関して追求する後付けの「論理学」とは原理的に区別される。」

¹⁵ 学問ないしヨーロッパの精神の「危機」についてのフッサールの見解とハイデガーの立場の相違は二人の現象学理解の相違にも直結する重要な事柄であるが、紙幅の都合上、本論文では扱うことができないため別の機会に論じたい。

[参考文献]

Collingwood, Robin G. (1939) 1983. *An Autobiography*, Oxford University Press.

Dilthey, Wilhelm. (1923) 1979. *Gesammelte Schriften*, Bd.1, Verlag von B. G Teubner.

Glazebrook, Trish. 2000. *Heidegger's Philosophy of Science*, Fordham University Press.

—. 2012. “Why read Heidegger on Science,” in *Heidegger on Science*, Trish Glazebrook (ed.), SUNY Press. 13–26.

Heidegger, Martin. 1976–. *Gesamtausgabe*, Vittorio Klostermann. (= GA).

—. (1927) 2001. *Sein und Zeit*, Max Niemeyer. (= SZ).

Husserl, Edmund. 1968. *Husserliana: gesammelte Werke*, IX, Martinus Nijhoff. (= Hua IX)

—. (1900) 1980. *Logische Untersuchungen*, Erster Buch, Max Niemeyer.

Zahavi, Dan. 2003. *Husserl's Phenomenology*, Stanford University Press.

榑原哲也. 2009. 『フッサール現象学の生成』, 東京大学出版会.

プラトン. 2004. 『パイドン』, 岩田靖夫訳, 岩波文庫.